

History

2014.10 建設運営アドバイザー決定
図書館をつくる職人・花井裕一郎氏が就任。

2015.3 全国公募で設計者が決定

「誰にでも居場所がある空間」を目指して設計しました。目的がなくても立ち寄りたくなる施設になってほしいです。



一級建築士事務所 o+h
大西 麻貴 代表

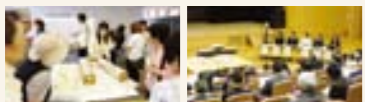
若手建築界をリードする逸材として注目されている[o+h](東京都)の代表。設計者の公募には全国から105組の案が集まり、1次審査を通過した5組による公開プレゼン審査で決定。

2015.5 初代館長が公募で決定

県内外47人の中から鳥越美奈館長を選任。

2015.6~ 意見交換や説明会 計33回

みんなで作る図書館プロジェクトが始動。



2015.8~ 26箇所でPR活動を展開



主催事業の「開館前年祭」や「福智スイーツ大茶会」、福岡市天神での「筑豊フェア」など、年間をととした町内外でのPR活動を展開。

2016.7 前例のない開館前の候補に

先進的な図書館を表彰する「ライブラリー・オブ・ザ・イヤー」一次選考通過は、開館前では異例。

2016.11 国内最大の図書館展で発表



横浜での図書館総合展(8日~10日)に町長と関係者が招かれ、取り組みの経過を発表。

2016.11 福智でフォーラム開催決定

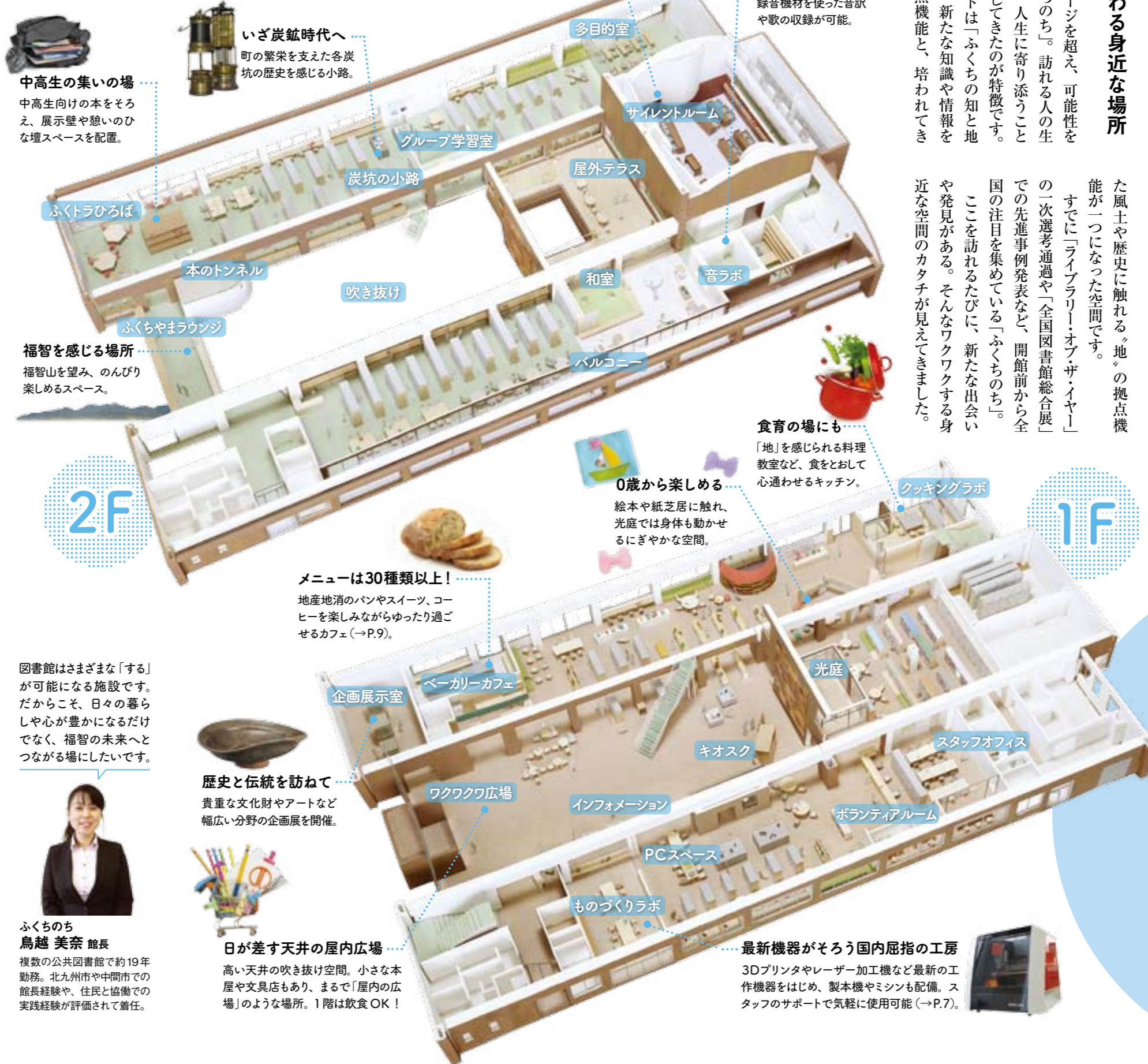
「図書館総合展2017フォーラム」の開催地に福智町が選ばれ3月27日⑧の開催が決定。

2017.3.19 「ふくちのち」オープン!

披露・内覧イベントを開催。

きっとどこかにある。あなたの気になる場所

図書館とは思えないほど多彩な機能の「ふくちのち」。最先端機器のものづくりラボや地産地消のカフェをはじめ、誰にとってもどこかにワクワクするようなスペースを備えます。(全館Wi-Fi利用可)



中高生の集いの場
中高生向けの本をそろえ、展示壁や憩いのひな壇スペースを配置。

いざ炭鉱時代へ
町の繁栄を支えた各炭坑の歴史を感じる小路。

ふくトラひろば

福智を感じる場所
福智山を望み、のんびり楽しめるスペース。

2F

メニューは30種類以上!
地産地消のパンやスイーツ、コーヒーを楽しみながらゆったり過ごせるカフェ(→P.9)。

図書館はさまざまな「する」が可能になる施設です。だからこそ、日々の暮らしや心が豊かになるだけでなく、福智の未来へとつながる場にしたいです。



ふくちのち 鳥越 美奈 館長
複数の公共図書館で約19年勤務。北九州市や中間市での館長経験や、住民と協働での実践経験が評価されて着任。

歴史と伝統を訪ねて
貴重な文化財やアートなど幅広い分野の企画展を開催。

日が差す天井の屋内広場
高い天井の吹き抜け空間。小さな本屋や文具店もあり、まるで「屋内の広場」のような場所。1階は飲食OK!

映画の上映も!
以前の「議場」が、本に没頭できる静かな空間へと一変。大きなスクリーンでの上映会も予定。

使い方もいろいろ!
録音機材を使った音訳や歌の収録が可能。

知と地が交わる身近な場所
図書館のイメージを超え、可能性を追求した「ふくちのち」。訪れる人の生活の一部として、人生に寄り添うことを当初から目指してきたのが特徴です。そのコンセプトは「ふくちのち」の知と地が交わる場所。新たな知識や情報を得る「知」の拠点機能と、培われてき

た風土や歴史に触れる「地」の拠点機能が一つになった空間です。すでに「ライブラリー・オブ・ザ・イヤー」の一次選考通過や「全国図書館総合展」での先進事例発表など、開館前から全国の注目を集めている「ふくちのち」。ここを訪れるたびに、新たな出会いや発見がある。そんなワクワクする身近な空間のカタチが見えてきました。

食育の場にも
「地」を感じられる料理教室など、食とおして心通わせるキッチン。

0歳から楽しめる
絵本や紙芝居に触れ、光庭では身体も動かせるにぎやかな空間。

クッキングラボ

1F

最新機器がそろった国内屈指の工房
3Dプリンタやレーザー加工機など最新の工作機器をはじめ、製本機やミシンも配備。スタッフのサポートで気軽に使用可能(→P.7)。

思っていた図書館と違う! 想像を超える。その空間と機能
「ふくちのち」のカタチ
「図書館」と聞くと浮かぶ「本を読む人のための静かな場所」というイメージ。それがどうでしょう... 福智で描かれた図書館の姿は、全く違うんです! 図書館がなかった町に、来年3月、ついに誕生を迎える「ふくちのち」。目指したのは「ふらっと立ち寄りたくなる」日常の居心地良い空間でした。

ふ 福智町 図書館・歴史資料館
名称「ふくちのち」
所在地 ▶ 福智町赤池970-2
※ 赤池支所をリノベーション
構造 ▶ 鉄筋コンクリート造2階建て
延べ床面積 ▶ 3016.76㎡
開館時予定冊数 ▶ 50,000冊
工事費 ▶ 4億2千万円
開館日 ▶ 平成29年3月19日⑧
開館時間(予定) ▶ 10時~19時

2017.3.19
OPEN
FUKUCHI | 2



上野小図書館

「ふくちのち」の柱となる「知の拠点」の機能

身近に本がある 心ゆたかな暮らし

知識と情報を
を得る

今までの知識と経験、情報や状況のもとに今を生活している私たち。知を得ることで視野が広がり、より豊かな日常生活にもつながります。その知を得る機会を提供するのが「知の拠点」の大切な役割です。

知の積み重ねをサポート

インターネットをはじめ、膨大な情報にあふれている今、何が正しくて自分のためになるのか、総合的に判断する力が求められています。子どもたちにとっては学ぶ力、正しい知識を獲得する力。大人にとっては、人の意見に惑わされずに自らの視点で見極める真の判断力だと言えます。

本は、心に響く言葉や自分が経験しきれないことなど、凝縮した情報を投げかけてくれます。本から得た知が一つの判断材料になり、時には行動を促さるのではないのでしょうか。知の積み重ねは判断力の大きな助けになり、視野や感性をも高め、日常生活を豊かにしてくれます。

また、本から得られる知的刺激は、



反射的に脳で考えることに直結し、考える習慣にもつながります。

「ふくちのち」開館時の蔵書数は、赤池・金田・方城の公民館図書館にある本に購入や寄贈分をあわせて5万冊。年を重ねるごとに冊数を増やし、みなさんのニーズと共に充実させる計画です。

福智ならではの付加価値

「ふくちのち」は、身近な「知の拠点」として、関係団体や図書館ボランティア、子育てサークルとの連携も深めながら、本との出会いをサポートしていきます。また、館内のあらゆる場所でも本を中心に、知って欲しい旬の情報や知識を凝縮して発信。新たな本や人のさまざまな出会いを大切に、交流を生む憩いの空間を目指します。

一方、ネット通販や電子書籍の普及

郷土の作家
特別寄稿

たかが一冊、されど一冊
上野 哲也

わたしは二十代の頃、一人きりでアメリカ大陸を西から東へ一か月かけてバスで横断したことがあります。そのとき日本から持っていた唯一の本が、開高健の「夏の闇」でした。なぜそれを選んだのかと言うと、本の主人公がわたしと同じ異国を一人で旅する日本人男性だったからです。

行く前から予想はしていたものの、やはり予想と現実は大違いでした。言葉の通じない異国での一人旅は思っていた以上に孤独で寂しく、それこそ暇さえあれば日本語を求めて本ばかりを読んでいた。しまいには、まるで本を読むために旅をしているかのような感じでした。だから帰国したときには、すでに本はぼろぼろになっていました。

三十年以上前のことなので、もうその本は手元にはありません。だけど、今でもときどきふと思いつくことがあるのです。その本の重さを、その匂いを、その手触りを、そして、旅と読書に明け暮れたその日々のことを...

どうです、あなたにもそんな一冊はありますか？



作家 上野 哲也 さん
福智町赤池出身。平成11年に45歳で「海の空の舟」で第67回小説現代新人賞を受賞、平成13年に故郷の炭鉱町を舞台にした「ニライカナイの空で」で第16回坪田譲治文学賞を受賞。そのほか、講談社などから著書多数。

つながりと本の力で 九国大や町内3校と連携

開館準備に合わせた企画をはじめ、教育連携のつながりと本の力で子どもたちを育てています。

新たな本との出会いの場を積極的に企画してきた「ふくちのち」。「ビブリオバトル」をはじめ「図書室の夜間開放」「大人のための朗読会」など、幅広く取り組んできました。今年6月に結ばれた町と九州国際大学との教育連携協定により、小中学生が大学生のサポートを受けながら表現力や読解力を高める授業もスタート。学校図書館とも連携し「ふくちのち」開館後の展開も期待されています。

本を知り人を知る
ビブリオバトル!



大学生との交流は互いに良い刺激になっています。(上野小)

人と本をつなぐ
ボランティア



赤ちゃんに向けたブックスタートのサポートや地域・学校での読書活動など、19年にわたって人と本との出会いのお手伝いをしているボランティアグループ「ぶらんこ」。11月20日に行われた大人に向けての絵本の読み聞かせ「絵本のつどい」では、それぞれの心に訴えかけるお話に涙を流す姿も見られました。

20年以上前に出会った「わすれられないおくりもの」という絵本の言葉が、今もわたしの活動の指針になっています。ぜひ絵本に触れ、心にストンと落ちる一冊を探してみてください。



絵本を読む会ぶらんこ
岸谷 元美 さん

図書司書
阿部直子オススメ



「嫌われる勇氣」
岸見一郎 / 古賀史健：著
人間関係の悩みを解決し、自分らしく幸せに生きるヒントをもらえる一冊。

図書司書
葛西沙織オススメ



「だいじょうぶ だいじょうぶ」
いとうひろし：作・絵
悩んだ時、疲れた時...大人にこそ読んで欲しい心に染みる人気の絵本です。



高性能な工作機器がそろう工房

「ものづくりラボ」Monozukuri-Lab

最先端機器で楽しみながら創造力が
高まるだけでなく、貴重な文化財や歴史資料の復元にも機能を発揮します。



3Dプリンタ
パソコン上で作った設計図どおりに溶けた樹脂が重なり、立体物が作成できます。



レーザー加工機
木材、プラスチック、皮革などさまざまな材質に精密なカットや装飾を施すことができます。



カッティングマシン
シールやフィルムなどを自由な形に切り抜くことができます。



大学とも連携していくものづくりラボ



大学と連携する「ものづくりラボ」が主催し、町内全小学校で行われた九州工業大生による体験授業。九州工業大学の前身は明治専門学校で、その礎が福智町にあった明治鋳業の赤池鋳山学校という地元のゆかりもあります。

説明会に参加した3中学の生徒会10数名が「ふくちのち」のコンセプトに感動し、「自分たちも関わりたい」と自主的に立ち上げた「ふくトラ」。ロゴも自分たちで作成し、「ふくちのち」をPRする壁新聞も設計チームと協働で作成しました。年間を通した活動で郷土の歴史や魅力を知り、ものづくりの楽しさを実感したメンバーたち。まちづくりに関わりたいという意識と輪が広がっています。

開館後も「ふくちのち」を拠点として福智の良さをアピールしたい。ふくトラの活動をとおしてそう思うようになりました。



ふくトラ
永井 佑季 くん(上野)

この町のポテンシャルと未来につながる創造力が高められています。



方城炭鋳跡地の稼働から46年目、町一番の企業「日立マクセル」は世界初のロータリーシェイバーを開発。

「ふくちのち」を共につくる ふくちトライアングル

町内全中学校の生徒会を中心に立ち上がった活動グループ「ふくトラ」。さまざまな“出会い”と“ものづくり”を一足先に体感しました。



ふくちのち
実物大本棚
&カウンター!



「ふくちのち」ができる場所で設計チームと1週間共に過ごし、街頭リサーチや模型づくりを経験したメンバー。11月の「ものづくりフェスタ」では、実物大のカウンターと本棚を段ボールで創作。

創造を特化した先駆的工房

福智の歴史や風土を振り返ったとき、時に際立つのが、長年にわたる高度な「ものづくりの土壌」。四百年以上の時を経て、今もなお土と炎で生み出される「上野焼」をはじめ、世界初の技術を開発した「三菱方城炭鋳」や「九州日立マクセル」など、ものづくりに挑み続ける精神が脈々と息づいています。



三菱方城炭鋳が開発した「スライジング探炭法」は国内探炭の主流となり、国のエネルギーを生み出しました。



町内に20窯が点在する上野焼。学校の作陶教室で年間10回以上、上野焼協同組合が作る楽しさを伝えています。

8年前に調査に着手した「城山横穴群(6~7世紀)」では、222の横穴墓と12の墳丘を確認。その数と規模、密集度と出土品が高く評価され、一昨年に「国指定史跡」となりました。中世では「福智修験」や足利尊氏ゆかりの「興国寺」、近世では小倉藩窯の「上野焼」、近代では「筑豊炭田関連遺産」など、豊かな文化が築かれてきた福智町。今もなお調査が進むにつれ、新たな発見や解明があり、かつての郷土の姿が浮かび上がっています。この地には、ふるさとが残したかけがえない遺産があり、それぞれが語りかけるメッセージがあります。それらを受け止め、次代に伝え、後世へと残すことは、今を生きる私たちの大切なテーマ。まちの歴史を知り、風土を再認識することが、郷土に根付く新たな創造や発展へと結びついていきます。

「ふくちのち」では、福智ゆかりの貴重な文化財などを展示予定。開館記念展では、古上野や福智山麓で生み出された茶陶が展示されます。すでに郷土を代表する作曲家・河村光陽の楽譜など、貴重な資料も寄贈されています。開館前から期待が高まる歴史資料館。その魅力が「地の拠点」としての機能を高め、郷土への誇りを育み、私たちが自らの可能性を見つめ直すことにつながっているのです。



福智の子どもたちのためにと、名曲「仲よし小道」など河村光陽直筆の楽譜を、娘の陽子さんが町に寄贈。

知ることで見えてくるもの

福智山の懐に抱かれて歴史を重ねてきたこの地。私たちは、その悠久の時を経て今を生きています。福智町にはおよそ8千年前からの人々の遺物が残され、発掘調査では紀元前3百年までの縄文時代の遺構が確認されています。

この地に刻まれた悠久の歴史や培ってきた伝統を体感する。 「ふくちのち」の基盤ともいえる「地の拠点」が担う温故知新の機能。 風土と共に生きる私たちが、この町で生きていることを振り返る空間です。

歴史と風土が物語る 創造力と潜在力

「ふくちのち」の礎を担う「地の拠点」の機能

歴史と風土
を感じる



上野斑釉茶碗 銘 みやぎの
(一財)田中丸コレクション蔵/山崎信一撮影/17世紀前期
上野焼の400年以上の歴史の中で最も長く創業した皿山本窯が誇る名器。

福智
ゆかりの
古陶



上野割山椒形向付

上野焼を創始した豊前小倉藩主・細川忠興の考案と伝わる山椒の実が割れたようなデザイン。千円以上で家が建った昭和4年に、同様の器が2万6千円以上で落札されています。



高取緑釉耳付四方水指 銘 若葉雨

新緑の季節の茶会で重用される際に、必ず雨が降ったという逸話を持つ名器。数年前までは上野焼とされましたが、発掘調査の類似から現在は高取焼と推定されています。

「ふくちのち」に香り豊かな空間 / 「ベーカリーカフェ」オープン!

地産地消と商品発祥の産地にこだわった「ベーカリーカフェ」が「ふくちのち」内にオープンします! 30種以上のパンと、カプチーノなど約4種のコーヒーに加え、上野焼の器で飲める限定の「福智ブレンド」も販売予定です。



「福智ブレンド」は世界大会で優勝経験を持つ焙煎士・後藤直紀さんが焙煎。



梅酒のシートで覆ったフォアグラのテリーヌ 福智産あまおうのスモークと共に

挑戦が示す「智」の拠点機能

都市圏で人気を集めている「ブックカフェ」。本とカフェが融合した空間が幅広い世代から注目されています。

で、魅力の相乗効果を五感で実感いただけます。上野焼の付加価値と知名度を高め、ジャパンブランドとしての海外展開も視野に入れながら、ウェブサイトやふるさと納税の返礼品としてもラインナップする予定です。

「ふくちのち」に設置されるベーカリーカフェでは、福智産の素材を使ったパンやスイーツ、香り高いコーヒーを、本とともに楽しむことができます。さらにここで彩りを添えるのが、上野焼の器です。

このカフェという誰もが集い、憩える「ふくちのち」の空間を生かして、上野焼や六次産業化、特産品の新商品など、ふくちの「地」を使った開発、発信をしていきます。

長い歴史と伝統を確認



7月の事前調査を経て、9月26日から3日間、金沢大学と町内のフィールドワークを行いました。

産官学連携による 上野焼ブランドブック 金沢大学が調査研究

金沢大学と電通と「ふくちのち」が連携し、上野焼の原点と今をまとめるブランドブックを作成します。

上野焼の歴史や特徴を解き明かし、今後のブランド化を効果的に進めるためのブランドブックを金沢大学の研究で作成中です。そこで「みなさんが上野焼をどう思っているか」をテーマにしたワークショップを開催します。ぜひお気軽にご参加ください。

金沢大学 上野焼ワークショップ 参加募集

- ① 12月22日 ⑥ 19:00- (中央公民館)
- ② 12月23日 ⑥ 10:30- (公民館 金田分館)
- ③ 12月23日 ⑥ 14:00- (公民館 方城分館)

④ 「ふくちのち」担当係 ☎ 28-4100



金沢大学 助教 丸谷 耕太 先生 人間社会学を研究し、地域創造やコミュニティ、観光まちづくり、伝統工芸などが専門。



Serre-セア- (福岡市) 辻塚 幸祐 料理長 フレンチシェフ。在カナダフロント総領事館料理長、サアラ軽井沢ホテル総料理長、大谷山荘洋食料理長を経て現在。

福智で生み出されるものの中で、最も歴史と伝統があるのが「上野焼」。この地域資源の価値をさらに高めるため、一つのプロジェクトが動き始めました。食と器の魅力を融合させた上野焼の新たなブランドシリーズ化。まちづくりでつながりを深めてきた二流シエフ集団「博多ミラベル21」と「ふくちのち」が連携し、フレンチや創作料理を彩る上野焼のグローバルな器を創作しています。

器の監修は、国内外でフレンチの腕をふるってきた博多ミラベル21の辻塚幸祐シェフ。創作は上野焼協同組合の若手作家が担います。完成した器は博多ミラベル21の加盟店舗で実際に使用され、一流の料理に華をそえる上野焼の器



「知」と「地」が交差して生まれる「智」 福智ならではの価値 共創へのチャレンジ

知識や創造力、つながりを生かし、風土を取り入れることで、福智らしさが光る新たな魅力と価値が生まれようとしています。



Agano La mue

「華をそえる器」がテーマの上野焼の新ブランド「アガノ・ラミュ」。ラミュはフランス語で脱皮の意味。上野焼の巴のマークと伝統を超えて挑む情熱がロゴで表現されています。写真はラミュが彩る辻塚シェフのフレンチの一例。



有名店の一流シェフなど20人以上が加盟し、食を通じた社会貢献活動を展開しているNPO法人「博多ミラベル21」。福智町とは食をテーマとした事業でつながりが深まり、今回のコラボレーションが実現しました。



福智の特産品「ふくち☆リッチジェラート」の新フレーバーを、プロジェクトの辻塚シェフやカフェの田中シェフと連携して開発していきます。



福智特産米のクルスティアン 天然鯛のマリネ添え



福智の銀杏とキャビアのブランマンジェ パセリ風味



子羊のロティ 福智産とよみつひめ 赤ワインソースを添えて



佐賀牛イチボのポトフ 福智の根菜をアクセントにして



栗のフィナンシェと 福智産地たまごのメレンゲ

もっと身近な空間に「ふくちのち」のある福智町講座施設を活用し、生かしていただける主役は、ほかでもない住民のみなさん。「ふくちのち」のこれからを考える講座を毎月開催します。



11月24日の初回は数々の図書館を手がけた元ヤフーの岡本真氏を講師に開催。

第2回講座 参加募集
日時 ▶ 12月16日(金) 15:00-
場所 ▶ 福智町中央公民館
テーマ ▶ 自分たちで考え実践する交流拠点づくり
講師 ▶ 村上有紀子さん
 兵庫県伊丹市のまちづくり活動のリーダー。「ふくちのち」のこれからを考えます。

☎ 「ふくちのち」担当係
 ☎ 28-4100

人が集い、多くの出会いと交流を生み、みなさんの夢を育む拠点—そう思い描いてきた夢がいま、形になろうとしています。学力、所得、失業率などの水準が全国的にも厳しい福智町。「図書館は不要」との意見もありましたが、だからこそ、まちづくりと人づくりの拠点を担う「ふくちのち」が必要だと強く思っています。これは決して大きさではなく、「ふくちのち」はまちを変える可能性を秘めた施設です。私もみなさんと一緒に夢を描きながら、「ふくちのち」の開館をワクワクしながら待ち望んでいます。



嶋野 勝 福智町長



みなさんが、それぞれの将来と子どもたちの未来、この町のことを真剣に思うからこそ、厳しいご意見やたくさんの期待の声が「ふくちのち」に寄せられました。日常生活の一部として愛されるために、心ときめくワクワクする空間を実現するために、「ふくちのち」の成長に向けた取り組みは、これからも続いていきます。次代を担う子どもたちが、さらに次の世代へと誇れる「まちづくりの拠点」を目指したチャレンジは、まだ始まったばかりです。



「あきらめるしかない。できるはずない」という意識ではなく、「こうありたい。やればできる」という前向きな意志こそ、前進には欠かせません。意識が変わる。夢が描ける。まちが変わる。そんな未来へとつながる可能性を「ふくちのち」は秘めています。当初から、日本一の図書館を目標に掲げてきた「ふくちのち」。その指標は、この町で生きるみなさんの心の豊かさです。地域と共に歩みながら成長する「ふくちのち」は、みなさんとの心の近さで日本一の図書館を目指しています。記念すべき開館はゴールではなくスタート。みなさんの生活に寄り添い、新たな価値を生み、カタチだけでなく全く新しい公共施設に生まれ変わることで、一つの建物であることを超えようとする「ふくちのち」の到達点です。

可能性で終わらせないために

力を及ぼす」と示されています。この読書活動をはじめ、知識を深める学びを力強くサポートするのが図書館機能です。また「ふくちのち」には、起業や技術革新につながる創造力を高めるものづくりラボ。想像力や感性を高める歴史資料館。地域ブランド化に展開するカフェなど、厳しい現状を克服するために必要な機能が備わっています。「ふくちのち」は、今だからこそ、この福智町に必要な施設であり、貴重な財源だからこそ、ムダにしないよう、より多くの人々に活用され、生活の一部になり、愛され続ける施設でなければなりません。

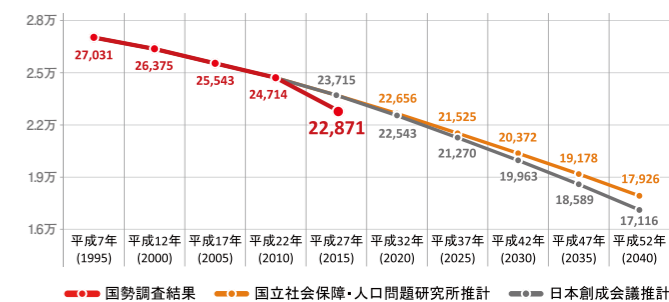


「ふくちのち」がどうあるべきか、これまで約60回にわたり、説明会やイベントなどで多くの意見が交わされてきました。

「ふくちのち」とわたしたち。その必要性と可能性
一つの建物という存在を超えるとき

これまでの説明会やPRの機会を通じて、たくさんの意見が寄せられました。多くの期待の声がある一方で「福智には合わない」「今の時代には必要ない」「本は借りない」「かかるお金がムダ」など否定的な意見があるのも確か。なぜ今この町に「ふくちのち」ができるのか。その必要性を探りました。

厳しい状況の今だからこそ
 福智町はいま、多くの深刻な課題を抱えています。全国や県平均を下回る学力、所得、失業率。特に人口の流出に歯止めがかからず、予想を超えるペースで減少が加速しています。昨年行われた国勢調査では、町の人口が5年間で1千800人以上も減少。各研究機関の予測を下回り、平成32年の人口予想に近い結果となりました。町の規模縮小は、私たちの生活や住環境にも大きく影響し、さらに人口減少を招く悪循環が懸念されています。この人口減少を克服するためには、町が抱える課題を解決へと導き、町の強みを生かしていくしかありません。とりわけ、学力の向上は多くの課題解決につながり、何より子どもたち一人ひとりの将来に直結しています。国の研究調査では「特に家庭での読書活動が子どもの学力に最も強い影響



かつて4万人以上いた福智町の人口は、炭鉱の閉山で3万人を割り、その後も減少傾向が続いています。平成27年の国勢調査では22,871人と最盛期の約半数となり、5年前の前回調査より1,843人減少。予想を上回るペースで人口減少が加速している現状が示されました。「ふくちのち」を中心とした課題解決が求められている町では、その効果と連動した定住促進施策も立案しています。